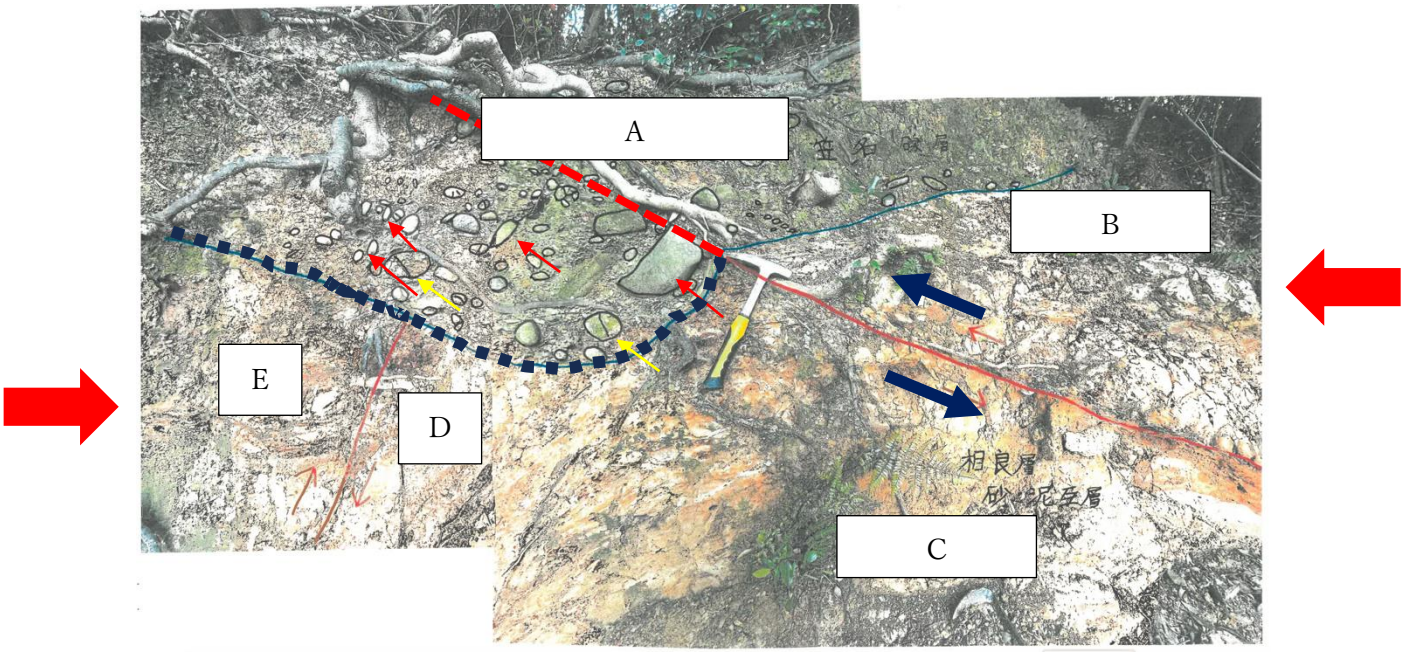
甲Ｂ１０６に関する補足説明

甲Ｂ１０６の断層露頭について補足して説明する。



最も上位に位置するＡは、笠名礫層である。笠名礫層は、海浜成笠名段丘堆積物であり、更新世後期である約８万年前に堆積した。B～E は、相良層であり、中新世から鮮新世にかけて（２３０３～２５８万年前）形成されたものである。

ＢとＣは、Ｎ６０Ｅ（断層の走行方向・北６０°から東に向けて走行）Ｗ２５（傾斜の方角・西側に２５℃の傾き）の逆断層で、東西両方向からの圧縮力（太い赤矢印）によって、上盤側であるＢがのし上がっている。

そして、断層面の延長上（赤点線）にある上載地層（笠名礫層）において、礫が剪断されたり（黄矢印)、本来であれば水平に堆積する礫が縦方向に堆積している（赤矢印）などの断層変位が起きている。

この断層変位の機序について説明を加える。上載地層の礫の形状からみて、上載層は川底であった。逆断層の上盤面がのし上がることにより、下盤面が相対的に下がることにより、紺点線のように谷が形成され、そこに後に笠名礫層が堆積した。そして、笠名礫層堆積よりも後の時代に B/C の断層が活動した際に、礫にも変位が生じたものである。笠名礫層は前記のとおり約８万年前に堆積したものであるため、B/C は活断層であると認められるものである。

なお、以下の写真は B/C の断層面を拡大したものである。